OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東京方言のジャンについて
Author(s)	松丸, 真大
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2001, 3, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第3号（2001年3月）33-48

東京方言のジャンについて

松丸　真大

【キーワード】ジャン（カ）、デハナイカ、認識と文脈の矛盾、情報提供

【要旨】

本稿では、東京方言で用いられているジャン（カ）について、デハナイカと対照することによって、形態的・意味的な異同を明らかにすることを試みた。その結果、ジャン（カ）はデハナイカに比べると、形態的な制約が厳しく、構成要素を他の形式に置き換えられないことが明らかになった。また、意味的にはジャンカとジャンの2つに分けられ、ジャンカはデハナイカⅠ類の用法のうち、「話し手の認識と文脈が矛盾」している場合にのみ用いられ、ジャンはデハナイカの用法のうち、「情報提供」を担う用法に限られることを示した。また、デハナイカⅡ類の用法でも、ジャンが「不確かさ」を表すだけでなく、それを聞き手に伝達する機能も担っていることなど、デハナイカに無い機能についても述べた。

1. はじめに

東京方言では、「ではないか」と並んでジャン（カ）という形式が用いられている。これらの形式は、(1) (2) のように類似した意味を持つ。

(1)　危ない｛じゃないか／ジャン｝！

(2)　ひょっとしたら、あいつが犯人｛じゃないか／ジャン｝？

しかしながら、ジャン（カ）の用法と「ではないか」の用法が全て重なるわけではない。

(3)　［「あいつは犯人ではない」と教えられて］
　　そうか、あいつは犯人｛じゃないか／＊ジャンカ｝。

このように、ジャン（カ）は「ではないか」と少し異なるのであるが、その出自は「ではないか」である。ただし、当該方言内で「ではないか」からジャン（カ）に変化したわけではない。井上（1998）によれば、大正か昭和初期に東海地方でジャンカが発生し、その後、ジャンカは横浜へ伝播した。そして戦後あたりに、このジャンカが当該方言に取り入れられたとされる。このようにジャン（カ）は「ではないか」を出自とする輸入形式であり、またその使用がくだけた場面に限られるためか、従来の研究ではこのジャン（カ）の意味・用法の記述があまりなされていないように思われる。本稿では、このジャン（カ）の意味を「ではないか」との対照によって明らかにすることを目的とする。

以下では、主に筆者の内省を用いて記述を行なう[1]。したがって、正確には東京方言の若年層、男性の用いるジャン（カ）の記述をすることになる。なお、以下の記述では、考察対象とする「ジャン（カ）」をカタカナ表記し、それ以外の形式は漢字ひらがな混じりで示

す。また、文末の「。」は下降調イントネーションを、「？」は上昇調イントネーションを表すが、特にイントネーションについて言及する場合には、「↑」（上昇調）、「↓」（下降調）という記号を用いることにする。

以下、本稿で参考とする「ではないか」についての先行研究を2.で簡単にまとめ、3.でジャン（カ）と「ではないか」の大まかな違いについて見る。4.ではジャン（カ）と「ではないか」を形態・意味の点から比較し、5.でこれら2つのジャン（カ）の記述をまとめる。

2. 先行研究

ジャンの意味について考察する際には、「ではないか」に関する研究が参考になると考えられる。ここでは本稿で参考にする分類枠について簡単にまとめる。

まず、ジャン（カ）と「ではないか」の形態的な特徴の相違を見る際には、田野村（1988）で指摘されている現象を参考とする。田野村（前掲）は「ではないか」が3つに分類できることを、形態的な操作可能性の違いから指摘した。具体的には、以下の（4a）～（4c）の「ではないか」は意味的に異なり、形態的にも【表1】にあげた点で違いを見せる（【表1】は田野村があげている現象から松丸が作成）。

(4) a.よう、山田じゃないか。 【第Ⅰ類】
b.（不審な様子から）どうもあの男犯人じゃないか？ 【第Ⅱ類】
c.（1は素数でないことを教えられて）そうか、1は素数じゃないか。 【第Ⅲ類】
（田野村1988：122；下線は松丸）

【表1】「ではないか」第Ⅰ類～第Ⅲ類の違い（田野村1988）

	第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅲ類
a.接続する述語の種類	用言・体言	体言	体言
b.置換可能性	×	○	△[1]
c.カの省略可能性	○	△[2]	△[3]
d.イントネーション	下降	上昇	自由

1：「ない」を「なかろう・あるまい」には置換できない。
2：「ではないだろうか・ではなかろうか・ではあるまいか」では不可
3：上昇音調で相手に対する発問や反問を表す場合に限り可能

このように、田野村（前掲）は「ではないか」が意味的・形態的に大きく3つに分類できることを指摘したが、それら3つの用法の意味記述は充分ではない。したがって本稿では、第Ⅰ類の意味を記述する際には、比較的詳細な分類を行なっている蓮沼（1995）の分類を若干修正したものを、第Ⅱ類の記述を行なう際には、安達（1999）のものを用いる。詳細については、それぞれの節を参照されたい。

なお以下では、第Ⅰ類の「ではないか」をデハナイカⅠ類、第Ⅱ類の「ではないか」をデハナイカⅡ類、第Ⅲ類の「ではないか」をデハナイカⅢ類と呼ぶことにする。また、デハナイカⅠ～Ⅲ類をまとめて指す場合（ジャン（カ）と対比する場合）には、デハナイカ

と表記する。そして、このデハナイカⅠ～Ⅲ類の機能を担う「ではないか」という形式自体を指す場合（「じゃないか」「じゃない」という形式と区別する場合）には、「ではないか」と表記する。

これらの先行研究を踏まえ、以下では具体的にジャン（カ）とデハナイカを対照し、その異同について考察する。

3. デハナイカの3分類とジャン（カ）

1節で既に見たように、ジャン（カ）の用法はデハナイカの用法と全て重なるわけではない。本節では、田野村（前掲）で指摘されたデハナイカの3分類を援用して、デハナイカとジャン（カ）を簡単に比較する。以下には、デハナイカⅠ～Ⅲ類の例文をジャン（カ）に置き換えて示す。

(5) デハナイカⅠ類の用法

a. よう、山田｛じゃないか／ジャン（カ）｝。

b. 何するんだよ、危ない｛じゃないか／ジャン（カ）｝。

c. 自分から言い出したん｛じゃないか／ジャン（カ）｝。

(6) デハナイカⅡ類の用法

a. ［不審な様子から］どうもあの男、犯人｛じゃないか／ジャン（カ）｝？

b. ［空模様を見て］雨でも降るん｛じゃないか／ジャン（カ）｝？

(7) デハナイカⅢ類の用法

a. ［1は素数でないことを教えられて］
そうか、1は素数｛じゃないか／＊ジャン（カ）｝。

b. ［1が素数ではないと君は言うが得心できない］
本当に1は素数｛じゃないか／＊ジャン（カ）｝？

例文（5）～（7）から、デハナイカⅠ・Ⅱ類の場合には、ジャン（カ）と置き換え可能であるが、デハナイカⅢ類の用法においてはジャン（カ）を用いることができず、その意味は、専らデハナイカによって表されることがわかる。デハナイカⅢ類の用法とは「「ない」が否定辞本来の性格を発揮する」（田野村 1988：122）ものであったが、ジャン（カ）から否定の意味を担う形態素が抽出できないことと無関係ではなかろう。

以上、ジャン（カ）がデハナイカⅠ・Ⅱ類に相当する用法を持つことを確認した。しかしこれら2つの用法においても、ジャン（カ）とデハナイカの間には異なった点が見られる。次節では、それぞれの用法において、ジャン（カ）とデハナイカを比較することによって、その異同を明らかにする。

4. ジャン（カ）とデハナイカの異同

本節では、デハナイカとジャン（カ）の異同を、(a) 形態的なふるまい、(b) 意味・用法、の2点から明らかにする。以下4.1.で形態的な差異について、4.2.で意味・用法上の差異について考察する。

4.1. 形態的な異同

まず、デハナイカⅠ類とそれに相当するジャン（カ）との間に見られる形態的な差異について考察する。田野村（前掲）によると、デハナイカⅠ類は「か」を終助詞の「の」に置き換えることが可能であり（置換可能性）、また「か」を省略することも可能である（省略可能性）。(8) に例を示す。

(8) a. あら、山田さんじゃない｛φ／の｝。（田野村 1988：120）
b. 何をするの、危ないじゃない｛φ／の｝。
c. 自分から言い出したんじゃない｛φ／の｝。

これに対してジャン（カ）の場合は、(9) のようにカを省略することは可能であるが、カを「の」に換えることはできない。

(9) a. よう、山田ジャン｛φ／＊の｝。
b. 何するんだよ、危ないジャン｛φ／＊の｝。
c. 自分から言い出したんジャン｛φ／＊の｝。

以上から、デハナイカⅠ類に対応するジャン（カ）は、「ジャン」もしくは「ジャンカ」の2形態しか持たないことがわかる。

次にデハナイカⅡ類とそれに対応するジャン（カ）について見る。田野村（前掲）では、デハナイカⅡ類の特徴として (10) のような形態的操作が可能であることをあげている。

(10) 置換可能性
a. 「ない」を「なかった」に置換
b. 「か」を「のか／かな／かしら／だろうか（でしょうか）」に置換
c. 「ない＋だろうか」を「なかろうか／あるまいか」に置換
省略可能性
d. 「か」を省略

ジャン（カ）の場合、「ない」という形態素が抽出できないため、(10 a, c) の操作は不可能である。また、(11) のように「か」を別の形式に置換することもできない。

(11) どうもあの男、犯人ジャン｛＊のか／＊かな／＊かしら／＊だろうか｝。

そもそも、デハナイカⅡ類に対応するジャン（カ）は、その後ろにどのような形式も後続させることができない。したがって (12) のように、「ね」が後続できない上に、本来ジャン（カ）の一部であったと考えられる「か」も後続できない。つまり、(10d) のように「か」を省略できるのではなく、「か」は付加できないのである。

(12) ということは、あらゆる女がいっしょにいる男に、かわいさというのをみているん｛じゃないかね／＊ジャンカネ／＊ジャンカ／＊ジャンネ／ジャン｝。
（例文は安達（1999：42）より）

以上、デハナイカⅠ・Ⅱ類に対応するジャン（カ）の形態的なふるまいを見てきた。ここでの議論をまとめると、【表2】のようになる。

【表2】デハナイカとジャン（カ）の形態的な異同

		ではないか	ジャン（カ）
デハナイカⅠ類	か省略	○	○
	か→の	○	×
デハナイカⅡ類	か省略	任意的	義務的
	ない→なかった	○	×
	か→のか／かな／かしら／だろうか	○	×
	ないだろうか→なかろうか／あるまいか	○	×
	ね付加	○	×

デハナイカⅠ類に対応するジャン（カ）は、「か」を「の」に置き換えられないという形態的制約を持つ。また、デハナイカⅡ類に対応するジャン（カ）は、「ジャン」という形でしか現れない。このことから、ジャン（カ）はデハナイカに比べて、形態的固定度が高いと言える。

上述の点を踏まえ、以下の考察では、デハナイカⅡ類に対応するジャン（カ）を（カは付加できないということから）ジャンと呼ぶことにする。

4.2. 意味的な異同

前節では、デハナイカとジャン（カ）の違いについて、形態的な観点から考察した。本節では、意味・用法の点からこれら2形式を比較する。以下、4.2.1.においてデハナイカⅡ類とジャンについて、4.2.2.でデハナイカⅠ類とジャン（カ）について考察する。また、4.2.3.では、関連する形式として「ではないか」をとりあげる。

4.2.1. デハナイカⅡ類とジャン

デハナイカⅡ類についてよく議論される問題は、確認要求表現との関連で、デハナイカⅡ類が情報要求機能を持つのか情報提供機能を持つのか、というものである（安達 1991, 1999；鄭 1994；三宅 1994）。以下では、この観点からデハナイカⅡ類とジャンを比較してみたい。安達（1999：77-91）では、ある文が情報要求機能をを持つのか、情報提供機能を持つのかを（13）（14）のような現象から判断している。

（13） 情報要求機能を持つことを裏付ける言語現象
- a.イントネーション： 上昇イントネーション
- b.応答文： 肯定（はい／うん）／否定（いいえ・ううん）
- c.感情・感覚述語の人称転換： 2人称に転換される

（14） 情報提供機能を持つことを裏付ける言語現象
- a.応答文としての使用： 談話の応答位置に現れる
- b.応答文： 「そうですか。」（情報受容）
- c.思考動詞の補文への生起： 「と思う」の補文に現れる
- d.モダリティ副詞との共起： 「たぶん」と共起する

ここで注意しておかなければならないことは、（13b）や（14a）の現象は、（13c）や（14c,d）

の現象とは異なり、発話連鎖の中での用いられ方の現象であるという点である。よく知られているように、談話連鎖の規則は文法規則と異なり、比較的曖昧な（ある程度違反可能な）ものである。例えば（13b）で考えてみると、情報要求文に対してでなくても「はい／いいえ」のような応答文は現れ得る。

（15）「（略）今日話したのは、何か食べる時、これ下さいってことだけ」
「それだけ？　じゃあ、そのうちひとりごと言うようになるよ。」
「うん、もう、なんか気がおかしいんじゃないかって思いますね。」

したがって「はい／いいえ」という応答文が現れることは、必ずしもその前の発話が情報要求文であることを意味するわけではない。この点を踏まえ、ここでは（13c）（14c,d）を中心に考察し、（13b）や（14a）の現象は補助的なものとして扱う。

それでは順に考察していく。まず、イントネーションは常に上昇調である。下降調で発話されるとデハナイカⅠ類の意味になってしまう。

（16）どうもあの男、犯人ジャン｛↑／＊↓｝。
（17）雨でも降るんジャン｛↑／＊↓｝。

応答文として「はい／いいえ」が生起することもできそうである（例は安達（1999：81）より）。ただ、デハナイカⅡ類の文に比べると、やや不自然に感じられる。

（18）「（略）今日話したのは、何か食べる時、これ下さいってことだけ」
「それだけ？　じゃあ、そのうちひとりごと言うようになるんジャン？」
「うん、もう、なんか気がおかしいんじゃないかって思いますね。」

（19）A：聞いてみるよ、今度
B：ううん
A：どうして？　女から結婚しようっていいにくいんジャン？
B：ううん（のみ込んでいる）
A：仲人してやるよ
B：したけりゃ、自分でいうわ

最後に、感情・感覚述語の人称転換について見てみる。安達（前掲）によると、平叙文の場合、感情形容詞を述語に持つ文の主体は1人称に限られ（20）、2人称には特に厳しい制限がある（21）。

（20）a.　私は寂しい。
b.＊彼は寂しい。
（21）＊（君は）寂しいかもしれない。　（安達 1991：82）

しかし疑問文の場合には、感情主体は2人称になる。

（22）（君は）寂しい？

これが、感情・感覚述語の人称転換現象であるが、デハナイカⅡ類の場合も人称の転換は起こる（例は安達（前掲）より）。

（23）ご気分でも悪いんじゃありません？

(24) A：そう。分かった（ゆっくり立ち上がり）うるさいようだけど、これで、なんにもいわなかったら、どう？（と窓へ寄り）あんな風に出ていって、それを知ってて、お母さんがなんにもいわなかったら

B：———

A：（外を見ながら）なんとなく淋しいような気がするんじゃない？

しかし、上の (23) (24) でジャンを用いると、不自然になる。

(25) ??（お前、）気分でも悪いんジャン？

(26) ??（お前、）なんとなく淋しいような気がするんジャン？

まず、ジャンを含む発話だけを見ると、主体が 2 人称の解釈は難しく、「(あいつは) 気分でも悪いんジャン？」のように 3 人称の解釈が自然である。また、無理に 2 人称の解釈をしても、相手に問い掛けるというよりは、むしろ「気分でも悪いんだろう」のように話し手の判断を持ちかけるような意味になる。

以上から、イントネーション・応答文の現象からはジャンが情報要求機能を持っていることが示唆されるが、感情述語の人称転換現象からは、ジャンの情報要求機能がほとんどないことがうかがえる。ただ、上で述べたように、応答文の現れ方は情報要求文の必要条件とはなり得ないことを考えると、ジャンは形態的には情報要求の形をとりながら、意味的にはそのような機能を失いつつあると考えることができる。ジャンが形態的に情報要求の形（上昇調イントネーション）をとるのは、それによってデハナイカⅡ類の意味とデハナイカⅠ類の意味を表し分けているためと考えられる。形態的固定度が高いジャンは、その他の手段でデハナイカⅠ類とⅡ類の意味を区別することができないのである。

では、情報提供機能の場合はどうであろうか。これも (14) を参考に見ていく。まず、「応答文としての使用」と「情報受容応答文が後続する」という現象から考察する。(27) を参照されたい。

(27) 1A：シュウジは、今日来んの？ 【情報要求】

2B：来ないんジャン？ 仕事が忙しいらしいから。 【情報提供】

3A：そっかー。じゃ、あと来んのはサイトウだけかぁ。 【情報受容】

(27) 2B のようにジャンを用いた文が応答文として用いられることができ、また 3A のようにその後に「そうか」などの情報の受容を表す形式が続くこともできる。

次に、思考動詞の補文中に生起可能かどうかについて見てみる。安達（前掲）では以下のような例文をあげている。

(28) 「なんだか元気がないですよ」と男が言う。

「どうして？」と女が訊ねる。

「今日で、三日か、四日誰とも話してないからね。ここに電話したら誰かとはなせるんじゃないかと思ってね。」

(29) しかし、知れば知るほど不安にかられるようになった。大人になるまでに森羅万象の謎が解き明かされてしまい、自分が発見することがなくなるのではないかと考えたのである。

このように、デハナイカⅡ類は思考動詞の補文中に現れることができるのであるが、(28)(29)の例文でジャンを用いると、適格ではなくなる（デハナイカⅡ類の意味ではなくデハナイカⅠ類の意味でなら可能である)。

(30) ＊ここに電話したら誰かとはなせるんジャンって思ってね。

(31) ＊自分が発見することがなくなるんジャンって考えたんだよ。

このことから、ジャンは聞き手の存在を必要とする形式であることがわかる。つまり、ジャンは「不確かさ」という判断レベルの意味だけでなく、それを「聞き手に伝える」という伝達レベルの意味も有していると言える。このことは、(32)のように独り言では「ジャン」が不適格になることからもうかがえる。

(32) a.［聞き手に向かって］ あいつが犯人ジャン？

b.［独り言で］ ＊あいつが犯人ジャン？

最後に、モダリティ副詞との共起について見てみる。安達（前掲）は(33)のように「たぶん」が情報要求機能を持つ文には現れないことから、「たぶん」との共起を情報提供文の特徴としてあげている。(34)を参照されたい。

(33) ＊たぶん明日の試合は激しい展開になりますか？。

(34) 「若い作家で山田さんのように、そういうのに共感を持ってる趣味のいい人っている？」「たぶん、いないんじゃない？」

ジャンもデハナイカⅡ類と同様、「たぶん」と共起することが可能である。

(35) たぶん、いないんジャン？

以上の議論をまとめると、【表3】のようになる。

【表3】デハナイカⅡ類とジャンの異同

		デハナイカⅡ類	ジャン
情報要求機能	イントネーション	殆ど上昇	常に上昇
	Yes-No 応答文が後続	○	○
	感情・感覚述語の人称の転換	○	??
情報提供機能	応答文としての使用	○	○
	情報受容応答文が後続	○	○
	思考動詞の補文中に生起	○	＊
	副詞「たぶん」との共起	○	○

【表3】からデハナイカⅡ類に比べると、ジャンは意味的にかなり限定されていることが分かる。形態的には情報要求の形をとるものの、意味的には情報要求機能を失いつつあり、専ら情報提供として機能する。また、ジャンの情報提供機能には、聞き手に伝達するという意味まで含まれる。

4.2.2. デハナイカⅠ類とジャン（カ）

ここでは、デハナイカⅠ類とジャン（カ）の意味的な差異について考察する。蓮沼（1995）では、デハナイカⅠ類の用法を(36)のように分類している。ただし蓮沼（前掲）で「認

識生成のアピール」とされ、一つにまとめられているもののうち、「話し手の個人的な評価や意見を聞き手にアピールするもの」と「今まで気づいていなかったことを発見した際の驚き」は、(a)「話し手の個人的な評価や意見を聞き手にアピールするもの」が対話で用いられるのに対して「今まで気づいていなかったことを発見した際の驚き」の用法は独話で使用可能である、(b)「話し手の個人的な評価や意見を聞き手にアピールするもの」は（ニュアンスの違いを除けば）デハナイカを「ネ」で置き換えることが可能であるが、「今まで気づいていなかったことを発見した際の驚き」の用法は置き換え不可能（三宅 1994）、の2点で異なる。したがって、ここでは別の類として扱う。

(36) i）共通認識の喚起
- a. 発話の現場にある対象についての視覚的な認知
- b. 話し手･聞き手の共有する過去の経験の中の要素
- c. 世間一般の人々が共有していると考えられる一般通念
- d. 想定の上で仮に構築された状況

ii）認識形成の要請
iii）認識生成のアピール（驚きの表示）
iv）話し手の個人的な評価や意見を聞き手にアピールするもの
v）伝聞情報確認
vi）勧誘・決意表明

それぞれに対応する例文を（37）～（46）にあげる。

i）共通認識の喚起

(37) a. ［タクシーの運転手に行く先を指示して］
あそこに郵便ポストが見えるじゃないですか。そのすぐ先の角を右に曲がってください。
b. 同級生に加藤っていたじゃないか。背の高い男の子。
c. A：子供って、みんなカレーが好きじゃない。
d. 仮に30人来るとするじゃない。そしたら、一人5千円の会費で、15万円くらいの予算でいけるよ。

ii）認識形成の要請

(38) だから、言ったじゃないの。あの人には気をつけなさいって。

(39) ［帰りの遅い夫を非難して］
妻：遅いじゃないの。
夫：仕方ないじゃないか。仕事が忙しいんだから。

iii）認識生成のアピール（驚きの表示）

(40) ［開けてみたら中身が空なのを発見して］なんだ、空っぽじゃないか。

(41) あら、皆さんお集まりじゃない。

iv）話し手の個人的な評価や意見を聞き手にアピールするもの

(42) 妻：このジャケット素敵でしょ。

夫：うん、なかなか似合ってるじゃないか。

(43) 何はともあれ合格できたんだからめでたいじゃないか。

v）伝聞情報確認

(44) 君の結婚相手、なかなか美人だそうじゃないか。

vi）勧誘・決意表明

(45) 今夜は、思いっきり飲もうじゃないか。

(46) 受けて立とうじゃないか。

この (37) ～ (46) の例文をジャン（カ）に置き換えてみると、(45) 以外の例文では全て適格となる。(45) のような勧誘用法の場合には、ジャン（カ）がやや不自然に感じられる。

(47) ？今夜は、思いっきり飲もうジャン（カ）。

ここで、ジャン（カ）のふるまいをもう少し詳しく見てみると、興味深いことが分かる。ジャン（カの省略されたもの）は、全ての例文で許容されるのに対して、ジャンカ（カが省略されないもの）を用いると不自然になる文がいくつかある。

(48) a. あそこに郵便ポストが見えるジャン｛φ／??カ｝。そのすぐ先の角を…

b. 同級生に加藤っていたジャン｛φ／??カ｝。背の高い男の子。

c. 子供って、みんなカレーが好きジャン｛φ／??カ｝。

d. 仮に30人来るとするジャン｛φ／??カ｝。そしたら、…

(49) だから、言ったジャン｛φ／カ｝。あの人には気をつけろって。

(50) 仕方ないジャン｛φ／カ｝。仕事が忙しいんだから。

(51) なんだ、空っぽジャン｛φ／カ｝。

(52) おっ、皆さんお集まりジャン｛φ／カ｝。

(53) なかなか似合ってるジャン｛φ／??カ｝。

(54) 何はともあれ合格できたんだからめでたいジャン｛φ／？カ｝。

(55) お前の結婚相手、なかなか美人だそうジャン｛φ／？カ｝。

(56) 受けて立とうジャン｛φ／カ｝。

以上の例から、認識の共有があらかじめ損なわれている場合（認識形成の要請：(49) (50)）、今まで気づいていなかったことを発見する場合（認識生成のアピール：(51) (52)）、決意表明の場合 (56) には、カを付加しても良いことがわかる。これらはいずれも対立した認識が存在する文脈での発話である。例えば、(49) では「過去に自分が与えた忠告をじゅうぶんに認識していなかった聞き手」と「既に認識していた話し手」、(51) では「何か中身が入っているだろう」という話し手の期待と「空っぽである」という現実の新情報が対立している。したがって、上例でカが付加されると不自然とされている文でも、対立する認識がある状況を想定すれば、カを付加できるようになる。

(57) A：あそこにポストが見えるジャン。　【←認識を共有しようとする】

B：え？　どこ？　【←認識が損なわれる】

A：ほら、あそこに見えるジャンカ。

(58) A：同級生に加藤っていたジャン。　【←認識を共有しようとする】
B：加藤？　いたっけ、そんな奴。　【←認識が損なわれる】
A：いたジャンカ。背の高い奴。

ただし、このような場合のジャンカは「共通認識の喚起」の意味から「認識形成の要請」の意味へとずれこんでいると考えられる。

上ではジャンカとジャンを比較し、その分布の違いを見たが、実はこのような違いは、デハナイカⅠ類として一つにまとめた形式の中でも見られる。ここでは、デハナイカⅠ類を「じゃないか」「じゃない」に分け、それぞれのふるまいの違いを見てみる。以下には、(37) ～ (46) の例文のうち、2形式に違いがあるものだけを示す。

(59) a. あそこに郵便ポストが見える {??じゃないか／じゃない} ？　そのすぐ先の角を…
b. 同級生に加藤っていた {??じゃないか／じゃない} ？　背の高い男の子。
c. 子供って、みんなカレーが好き {??じゃないか／じゃない} ？
d. 仮に30人来るとする {??じゃないか／じゃない} ？　そしたら…

ただし、(59) で「じゃないか」を「じゃないですか」のように丁寧体にかえると、「じゃないか」でも不自然ではなくなる。また、以上の例は話者が男性であることを想定しているが、話者が女性の場合には、そもそも「じゃないか」をあまり使用せず、専ら「じゃない」を用いる（これは上にあげた (37) ～ (46) の例文でも同様である）。そのため、「じゃない」を用いた発話には「女性的」なニュアンスが伴う。このように、「じゃないか」と「じゃない」は、まず話者の属性による違い（社会方言）があり、その中で (59) のような意味的な違いが存在するのである。

以上、ジャン（カ）とデハナイカⅠ類の違いについて考察したが、ジャン（カ）にはデハナイカⅠ類の用法として上にあげられていない用法がある。(60) のようなものである。

(60) ［自分の誕生日を知らない聞き手に対して］
私って、5月3日生まれジャン？　だからいつも休みで、…

(60) は、これから話そうとする話題の前提として共有する認識を提示し、聞き手のあいづちを求めるものである。前提の導入であるため、そのまま話し手が会話の主導権を握って話すということが暗黙のルールとしてある。したがって、この用法で (61) 2B のようなものはルール違反である（ルール違反ではあるが、不適格ではない）。

(61) 1A：私って、5月3日生まれジャン？
⇒2B：あっ、そーなの？　全然知らなかったー。私もさー、…

ここでは、この用法を「共有すべき認識の提示」と呼んでおく。ただしこの用法は、最近若年層に広がってきているものであり、全ての人が許容するわけではないようである（この拡張用法は他方言でも見られる。浅尾（本誌）・玉懸 (2000) を参照）。「共有すべき認識の提示」の用法は、「じゃない」にもあるが、「ジャンカ」「じゃないか」には無い。

(62) 私って、5月3日生まれ {じゃない／＊じゃないか／＊ジャンカ}。だからいつも休みで、…

この「共有すべき認識の提示」は、蓮沼（1995）の「共通認識の喚起」のうち、現象描写文にジャン（カ）を用いたもの（48a）のように、聞き手が対象を認識していない場合でも用いることができる用法を介して生まれたものと考えられる。

(63)　あそこに郵便ポストが見えるジャン。そのすぐ先の角を…　　[＝（48a）]

以上の点をまとめると、【表 4】のようになる（表の中の用法は、上にあげた例文の順ではない）。

【表4】デハナイカⅠ類とジャン（カ）の異同

	デハナイカⅠ類		ジャン（カ）	
	じゃないか	じゃない	ジャンカ	ジャン
勧誘	○	○	?	?
決意表明	○	○	○	○
認識生成のアピール	○	○	○	○
認識形成の要請	○	○	○	○
伝聞情報確認	○	○	?	○
話し手の個人的な評価や意見	○	○	??	○
共通認識の喚起	??	○	??	○
共有すべき認識の提示	*	○	*	○

デハナイカⅠ類とジャン（カ）は、ジャン（カ）が勧誘の用法でやや不自然になるという点で異なる。また、「じゃないか／ジャンカ」（カが付加された形式）と「じゃない／ジャン」（カの無い形式）の違いは、形式的により短い「じゃない／ジャン」が、より広い用法で用いられるようになっているという点であろう。ここから「じゃない／ジャン」は、より文法化の進んだ形式であると考えることができる。ただし「ジャンカ」の場合には、対立する認識がある文脈でしか用いられないという制約が存在する。

4.2.3.　「ではないか」について

上では、これまでデハナイカとしてまとめられてきた形式を「じゃないか」と「じゃない」に分け、その異同を確認した。しかしデハナイカには、「ではないか」という形式もある。この形式は東京方言（東京での話しことば）ではほとんど用いられないため、前節での考察には含めていないが、そのふるまいを確認しておく必要がある。本節では、この「ではないか」について簡単にまとめる。

「ではないか」は、上にあげた例文（37）～（46）の全てにおいて適格になるわけではない。「共通認識の喚起」の用法（65）や「話し手の個人的な評価や意見」を述べる用法（64）では、不適格となる（ただし、この内省は話者によって異なる可能性がある。テクスト資料などを用いて検証する必要がある）。以下の例を参照されたい。

(64)　??なかなか似合っているではないか。　　[＝(42)]

(65)　a.　＊あそこに郵便ポストが見えるではないか。そのすぐ先の角を…[＝(37)]

b.　＊あの会議に加藤という者がいたではないか。紺のスーツを着た男性。

c. ＊子供って、みなカレーが好きではないか。

d. ＊仮に30人来るとするではないか。そうすると…

また、拡張用法である「共有すべき認識の提示」用法においても不適格となる。

(66) ［言語学を全く知らない聞き手に対して］

＊ローマン・ヤーコブソンはプラーク学派ではないか。したがって、…

以上の点をまとめると、以下の表のようになる。比較のため「じゃない（か）」「ジャン（カ）」の結果（【表4】）も併せて示す。

【表5】「ではないか」と「じゃない（か）」「ジャン（カ）」の異同

	デハナイカ			ジャン（カ）	
	ではないか	じゃないか	じゃない	ジャンカ	ジャン
勧誘	○	○	○	?	?
決意表明	○	○	○	○	○
認識生成のアピール	○	○	○	○	○
認識形成の要請	○	○	○	○	○
伝聞情報確認	○	○	○	?	○
話し手の個人的な評価や意見	??	○	○	??	○
共通認識の喚起	＊	??	○	??	○
共有すべき認識の提示	＊	＊	○	＊	○

以上のように、デハナイカとしてまとめられた形式の中でも、それぞれ意味的に違いがあり、「ではないか」から「じゃない」になるにしたがって（すなわち文法化が進むにしたがって）、その用法が拡張していくことがわかる。

5. まとめ

4.では、デハナイカⅡ類とジャン（カ）、デハナイカⅠ類とジャン（カ）を比較することによって、ジャン（カ）とデハナイカの異同を確認した。ここでは、まとめとしてデハナイカⅡ類・デハナイカⅠ類の用法間の関係を整理し、その中にジャン（カ）の担っている意味・用法を位置付けたい。

デハナイカの意味について考える際に有効と思われるものとして、「話し手の認識と文脈の矛盾」と「情報提供」という意味があげられる。鄭（1994：33）によると、デハナイカⅠ・Ⅱ類の情報要求機能は、「現実の新情報Pと話し手の予想~Pが対立」しているという状況で用いられるとされている。また、森山（1989, 2000）においても、デハナイカⅠ類は「話し手が聞き手と違った意見であるという意味の上に、さらに、話し手のほうが正しいという意味をもつよう」であり（森山 1989：118）、またデハナイカⅡ類も「まだ明らかなものとして共有されていないということを前提として、話し手の考え方を提案する場合」に用いられるとしている（森山2000：54）。この「話し手の認識と文脈（状況）の矛盾」という制約は、デハナイカⅢ類の特徴を受けついだものである（詳細は井上（1994）を参照）。例えば（6a）の例で考えてみると、デハナイカⅢ類が発せられるには、「ヤツは犯人ではな

い」という、話し手の見込みとは異なる共有認識が談話の場に存在していなければならない。

(67) A： 証拠も無いし、ヤツはシロだな。 【ヤツ≠犯人】
B： 本当に、ヤツは犯人じゃないか？

(68) A： 証拠も全て揃ってるし、ヤツが犯人だよ。 【ヤツ＝犯人】
B：＃ヤツは犯人じゃないか？

この「話し手の見込み」が形式として固定化したのがデハナイカⅡ類であるが、この形式においても、上述の状況制約は受けつがれている。

(69) A： 証拠も無いし、ヤツはシロだな。 【ヤツ≠犯人】
B： 本当か？ 本当はヤツが犯人じゃないのか？

(70) A： 証拠も全て揃ってるし、ヤツが犯人だよ。 【ヤツ＝犯人】
B：＃ヤツが犯人じゃないのか？

(69) のように話し手の見込みに反する状況があれば、デハナイカⅡ類は使用できるが、(70) のように話し手の見込みと談話の場で共有されている認識とが同じ場合にはデハナイカⅡ類は使用できない。この「話し手の認識と文脈の矛盾」という意味は、デハナイカⅠ類の一部の用法にも見られ、「対立」というニュアンスを伴って現れることが多い。

(71) なんだ、空っぽじゃないか。 [＝ (40)]

(72) 仕方ないじゃないか。仕事が忙しいんだから。 [＝ (39)]

4.2.2.で述べたように、(71) は「中身が入っているだろう」という期待と「空っぽである」という新情報との矛盾（対立）、(72) は「夫の仕事が忙しいから帰りが遅いのも仕方がない」と思わない妻の認識とそう思っている夫の認識との矛盾（対立）である。

この「話し手の認識と文脈の矛盾」と「情報提供」という考え方を用いて、デハナイカⅢ類・デハナイカⅡ類・デハナイカⅠ類の用法を整理してみると、【表6】のようになる（勧誘・決意表明用法は動詞述語の場合にしか用いられない用法であるため、特殊な用法として扱い、以下の議論からは除くことにする）。

【表6】デハナイカの用法間の関係

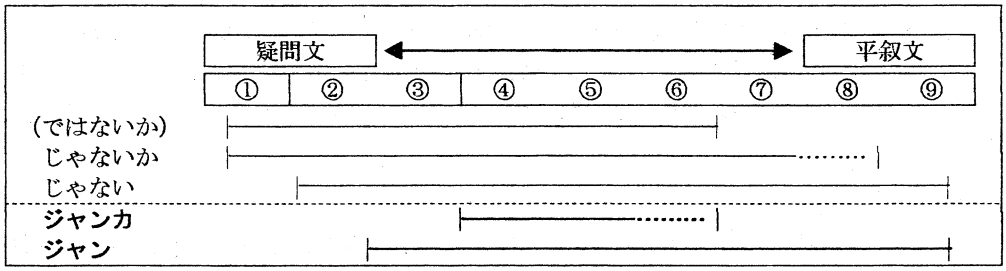
		話し手の認識と文脈との矛盾	情報提供
① デハナイカⅢ類		○	×
② デハナイカⅡ類	情報要求	○	×
③	情報提供	○	○
④ デハナイカⅠ類	認識生成のアピール	○	○
⑤	認識形成の要請	○	○
⑥	伝聞情報確認	×	○
⑦	話し手の個人的な評価や意見	×	○
⑧	共通認識の喚起	×	○
⑨	共有すべき認識の提示	×	○

【表6】から、デハナイカが有する意味は、デハナイカⅢ類からデハナイカⅠ類にいくにし

たがって情報要求機能を失っていることがわかる（即ち、情報提供機能を獲得している）。また本来デハナイカⅢ類が持っていた「話し手の認識と文脈の矛盾」という状況制約も失い、単に「話し手が情報的に優位」ということを示すだけになってきていると考えられる。

最後に、上表の①～⑨の用法とそれぞれの形式の関係を示すと、【図 1】のようになる。ただし、デハナイカの用法がこのように一元的に並ぶのかどうかについては、更に検討する必要がある。

【図 1】デハナイカ諸形式とジャン（カ）の用法



【図 1】から、ジャンカはデハナイカⅠ類（第Ⅰ類の用法）の中でも「話し手の認識と文脈の矛盾」の意味を残す用法（「対立」ニュアンスが出るもの）に限られることがわかる。ジャンは、それに比べると広い用法をカバーし、デハナイカⅡ類とデハナイカⅠ類の両方の用法を持つが、情報提供機能を果たすものだけに限られている。また、この「情報提供機能だけを果たす」ということと関係してか、ジャンはデハナイカⅡ類の用法において、「不確かさ」を表すだけでなく、それを聞き手に伝える伝達的態度の意味も担っている。

6. おわりに

本稿では東京方言で用いられているジャン（カ）について考察してきた。本稿で論じたことを、以下にまとめておく。

1) ジャン（カ）はデハナイカに比べると、形態的に制約され、また狭い範囲の意味・用法でしか用いられない
2) ジャンとジャンカは異なったふるまいを見せ、ジャンカは認識が対立している状況でしか用いられないのに対して、ジャンは話者の認識を提示する機能を担う

また、考察の過程で、

3) 従来デハナイカとして一つにまとめられていた形式群の中でも意味・用法に違いが見られる

ということがわかった。

以上のように本稿では、東京方言で用いられているジャン（カ）についてデハナイカとの対比という観点から見てきたわけであるが、今後はそれぞれの用法の詳細な意味記述を行なう必要がある。また、他方言でジャン（カ）と類似した用いられ方をする形式があることは上にも述べたが、それらの形式との比較も必要であろう。これらの作業によって、

【図1】にあげた用法間の関係が検証できると考えられる。今後の課題としたい。

【注】

1) 筆者の居住歴は以下の通りである。

居住歴： 1973年生まれ～1988年： 京都府京都市左京区
1988年～1997年： 東京都江戸川区
1997年～現在： 大阪府池田市

以上のように、第二方言として当該方言を用いていることから、筆者の内省が母方言話者のそれと異なる可能性がある。そのため、判断しづらい例文に関しては、当該方言を母方言とする話者2名（いずれも1973年生まれ、男性、移住歴なし）の内省も確認しているが、筆者のものと異なることはなかった。

【参考文献】

浅尾いずみ（2001）「鳥取市方言における文末詞ガー」『阪大社会言語学研究ノート』3（本誌）
安達太郎（1991）「いわゆる「確認要求の疑問表現」について」『日本学報』10 大阪大学文学部日本学研究室
――――（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書
井上優（1994）「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究所報告107 研究報告集』15 秀英出版
田野村忠温（1988）「否定疑問小考」『国語学』152
玉懸元（2000）「仙台市方言における終助詞「ッチャ」の談話機能」『国語学会 平成12年度春季大会要旨集』
鄭相哲（1994）「所謂確認要求のジャナイカとダロウ－情報伝達・機能論的な観点から－」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部現代日本語学講座
蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為 －「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法－」仁田義雄編『複文の研究（下）』 くろしお出版
三宅知弘（1994）「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部現代日本語学講座
森山卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
――――（2000）「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店

まつまる みちお（大阪大学大学院生）
michio_m@d8.dion.ne.jp